

笙子せいしがきた冬

原作・北原樹恒

作・やまねたかゆき

1

今日は街中が、どこか浮かれたような印象を受ける。そう感じるのは、私自身がこれ以上はないつてくらいに浮かれているためだろうか。

札幌では冬真っ盛りの二月十四日。

時刻は昼少し前。

雪が静かに降っている。

私 進藤沙紀しんどうさきは、約束の時刻よりもかなり前から、JR札幌駅の西改札口の前に立っていた。

三分おきに、腕時計を見て。

十分おきに、自分の時計は合っているかと駅の時計を確かめて。

長針の動きは、普段の半分くらいの速度に思えた。

それでも少しずつ、確実に、時は過ぎてゆく。

新千歳空港からの電車が到着したのだろう、スキーやボードを抱えた、本州からの観光客らしき人たちの姿が増える。

私はかなり遠くから、その中に混じった、髪の毛長い小柄な少女の姿を見つけていた。

向こうは、改札を出たところで私に気付いたようだ。満面の笑みを浮かべて駆けてくる。

「沙紀さん！」

力いっぱい助走をつけて飛びついてきた少女を、しっかりと受け止めた。

菱川笙子ひしかわせいし。私の最愛の少女。

十五歳の中学三年生と、二十二歳の女子大生の、しかも女同士のカップル。端から見たらひどく不自然かもしれない。けれど、そんなこと気にしない。

私は、笙子をぎゅうつと抱きしめる。

笙子も、私の身体に腕を回してくる。

本来はかなり華奢なはずの笙子だけど、今日は厚手のセーターとオーバーで着ぶくれて、まるでふかふかのぬいぐるみみたいで、とつても抱き心地がいい。

本当ならば、このまま熱い口づけを交わしたいところだ。が、さすがに大勢の人で賑わう札幌駅でそれをするのは躊躇われる。だから、頬をすり寄せるふりをしながら、ちゅっと一瞬だけ唇を重ねた。

「……会いたかった」

「わたしも……」

続く言葉が出てこない。潤んだ瞳で見つめ合つて、そこに二人だけの世界が構築される。

……と。

控え目な咳払いが、二人の間に割り込んできた。笙子はぱつと私から離れて、後ろを振り返る。

そこに立っていたのは、一人の女性だった。二十代後半か、せいぜい三十歳くらい。高級そうなカシミアのコートを格好よく着こなして、やり手のキャリアウーマンって感じ。

「帰りの飛行機に遅れないように、六時までにはここに帰ってきてくださいね」

その女性がにっこりと微笑む。

「……わかってます」

不承不承、といった口調で笙子が応える。

「笙子、この方は？」

「桜子さんっていつて……」

「要するに、お目付役ですね。お嬢様がまた帰つてこなかったりしたら、面倒なことになりますから」

「……わかってます。今度はちゃんと帰ります！」

ふくれた笙子も、ちよつと可愛い。

私は心の中でうなずいていた。考えてみれば当然のことだ。昨年夏の家出以来、親の監視が厳しくなった笙子が、日帰りとはいえ一人で北海道に來られるはずがない。

「それなら結構。では六時まで自由行動ということとで」

「桜子さんは？」

笙子が訊く。私とのデートにまで付いてくるのかと心配していたのだろう。

「いくらなんでも、デートの邪魔をするほどヤボではありません。それに、せっかく北海道へ来たのですから、私にもいろいろとやることです」

桜子さんはそれだけ言うと、コートの裾を颯爽

と翻して歩いていった。行動の一つ一つが様になる人だと感心する。

「……私たちも、行こうか」

桜子さんの後ろ姿が見えなくなったところで、笙子の肩を叩いた。

時間はあまりない。東京 札幌日帰りの、半日だけの逢い引きなのだから。

浮かれると同時に、正直なところ私はかなり驚いてもいた。

一昨日の夜、突然電話をもらったのだ。「バレンタインデーに会いに行きます」と。

今年の二月十四日は平日なのに。

だけど笙子はもう推薦で進学が決まっているし、私も大学の卒業を間近に控えて特にすることはないから、平日も休日も関係ないといえなくもない。

笙子が来る。

笙子に会える。

嬉しくて嬉しくて、昨夜はよく眠れなかった。

たった半日しか一緒にいられないけれど、それは仕方がない。親には内緒で来ているのだから。

地下鉄の駅から外に出ると、真っ白い街並みが広がっている。二月の札幌で、道路のアスファルトを目にする機会は少ない。

「滑るから気をつけて。私に掴まって」

差しだした腕に、笙子がしがみついた。道路脇に人の背よりも堆く積み上げられた雪の山を見て、

目を丸くしている。冬の北海道を訪れたのは初めての筈。

「どうせならもう何日か早く、雪祭りに合わせて来ればよかったのに」

しかし笙子は首を振って応えた。

「やっぱりバレンタインデーですよ。沙紀さんに会いに来たんですから」

「そうだったね」

笙子は北海道観光のために来たわけではない。

ただ、私に会うためだけに来てくれたのだ。バレンタインのチヨコレートを直接手渡す、そのためにだけに日帰りで北海道まで来るあたりは、さすが大金持ちのお嬢様。

* * *

笙子を迎えに行くとき、ヒーターをつけっぱなしにしておいたから、部屋は暖かった。コートを脱ぐのももどかしく、私たちは抱き合った。

今度こそ、しっかりと唇を重ねる。

相手の身体にしっかりと腕を回して、身体を密

着させて、情熱的に舌を絡め合う。

久しぶりに味わう柔らかな唇の感触を、心ゆくまで堪能する。

頭がぼうつとなるくらいの激しいキスを数分間続けて、ようやく唇を離れた。どちらからともなく、小さく苦笑する。

顔が真っ赤なのは、寒い外を歩いてきたためではない。

「えっと、あの。沙紀さん、これ……」

笙子は照れを隠すように、バッグの中から小さな包みを取り出した。綺麗にラッピングされてピンク色のリボンが結ばれている小箱は、いうまでもなくバレンタインのチョコレート。

「ありがとう」

ベッドに腰掛けて、包みを開ける。思わず、笑いがこぼれた。

「これ、笙子の手作り？」

「どうしてわかったんです？」

「だって、形がいびつだもの」

「ひどーい！」

笙子は唇を尖らせて、私の手から箱を取り上げ

た。

「そんなこと言うならあげません。これでも、一生懸命作ったんですよ」

「あはは、ごめんごめん。わかってるよ、初めてなんでしょう？」

箱入り温室育ち、純粹培養のお嬢様。初めて会ったときは、料理をはじめ家事はほとんど何もできなかった。そんな笙子が、私のためにチョコレートを手作りしてくれた。外国製のどんな高級チョコだって、簡単に買えるくらいお金持ちなのに。

その気持ちが、とても嬉しい。

「形はちよつといびつですけど……味は、大丈夫だと思っんですよ。……食べてもらえますか？」

「もちろん、喜んで」

笙子は、チョコレートを一つ摘んで差し出した。あーんと開いた私の口に入れてくれる。

チョコレートは、舌の上ですうっと溶けていった。

「……いかがですか？」

「すごく、美味しい」

クリームをたっぷり使っているのか、とても舌触りがまるやかで、なんだか笹子らしい味って思えた。

「ホントにありがとう」

頭を抱えるようにぎゅっと抱きしめて耳元でささやいて。それから私も、小さな包みを差し出した。

「私も一応、チョコレート用意したんだ。急だったんで、手作りとはいかなかったけど」

「昨日の夜電話をもらって、昨日、三越のお菓子売り場で買ってきた。」

「沙紀さんの愛がこもっているなら、なんだって嬉しいです」

「もちろん、愛情だけはたっぷりと包みを開けながら、笹子は笑う。」

「……可愛い。今でももらったチョコレートの中で、いちばん嬉しいです」

「もらったこと、あるの？」

「え？ ええ、学校の先輩に、いくつか」

先輩に……ではないところが笹子らしい。きっと、女子校のお姉さまたちに可愛がられているの

だろう。

「沙紀さんはきつと、いっぱいもらうのでしょうか？」

「まあ……いくつかは」

曖昧に言葉を濁す。体育会系の常というか、道場の先輩たちからもらうチョコレートは、毎年それなりの数になる。

「沙紀さんって、もてそうですもんね」

「そんなことないよ」

「やきもちを妬いたような口調が嬉しい。」

「それより、食べてもらよ。それとも、食べさせて欲しい？」

「あ……はい」

先刻の私のように、こちらを見た笹子が顔を上げて口を小さく開く。だけど私は、摘んだチョコレートを直接その口には入れなかった。笹子と同じことをしても芸がない。

自分の唇でチョコレートの端をくわえて、顔を近づける。私の意図を察した笹子は、頬をいっそう赤らめて反対側の端に口をつける。

両側から、こりこりと小さな音を立ててチョコ

レートを食べていく。

二人の顔が近付いていく。

そして、唇が重なった。

甘い味のする唇。

どちらからともなく腕を伸ばして、相手を抱きしめた。そのまま、ベッドに倒れ込む。

「う……………うん……………」

もう一度、息もできないくらいに激しいキス。

舌を伸ばして、相手の舌を舐める。

チョコレート味の甘い唾液が混じり合う。

「ん……………ふ……………うん……………ふ……………」

口の中のチョコレートの味がなくなるまで、その行為を続けた。身体を擦り付けるように、しっかりと抱き合って。

そうして、お互いの気持ちを高めていく。チョコレートを渡すという、名目上のセレモニーは終わったのだから、もう次の段階に進んでもいいはずだ。

「あ……………ふう……………」

唇が離れると、笙子は感極まったような吐息を漏らした。瞳が潤んでいる。

「……………美味しかった？」

耳元でささやくと、恥ずかしそうにくくんとうなづく。

「もうひとつ食べたい？ それとも、もっと違うコトしたい？」

「え……………？ あの……………えっと……………」

笙子が真っ赤になって、目をそらした。私はもう一度、耳に口を寄せる。

耳たぶにキスをして、軽く咬んで、舌先でくすぐって。

笙子の身体がぴくんと震える。

「服……………脱ごうよ。裸になって、抱き合いたい。」

笙子の身体に、触りたい」

素直な気持ちを口にした。笙子が相手なら、私はいくらでもエッチになれる。

笙子が微かにうなずいたので、私は一度立ち上がって、ヒーターの設定温度を少し上げた。これで、裸になっても寒くはないだろう。

「立って」

「え……………？ はい」

私の言葉に素直に従った笙子と、立って向き合

う形になった。セーターの裾に手をかける。

「万歳して」

笙子が両腕を上げる。身体を撫でるようにしながら、セーターを脱がす。

次にスカート。お尻の感触を掌で楽しんでから、フアスナーを下ろす。

ソックスは片方ずつ。笙子の脚を抱えるようにして。

後ろを向かせて、背後から抱きすくめる。うなじに唇を押しつけて、片手は胸の上に置いて、もう一方の手でブラウスのボタンを一つずつ外していく。

背中にキスをしながら、ブラのホックを外す。両手で、乳房を包み込む。

「少し、大きくなったかな？」

相変わらず小ぶりの胸ではあるけれど、半年前よりも少しだけ揉み応えが増していた。笙子はまだ十五歳、胸はこれから成長期。

そうして私はたっぷりと時間をかけて、少しずつ笙子を裸にしていた。

いよいよ、最後の一枚。笙子の前に跪く。

シルクのショーツの薄い生地越しに、淡い茂みの部分にキスをする。その奥の部分は、色が変わっているのはつきり見て取れるほどに濡れて、大きな染みになっていた。肩のあたりに鳥肌が立っていたのは、寒いためではないのだろう。

「手で隠しちゃだめだよ」

釘を刺してから、スルスルとショーツを下ろしていく。笙子の秘所と生地の間で、透明な粘液が糸を引いてた。

笙子は恥ずかしそうに身体を震わせ、それでも私の言いつけを守って、気を付けの姿勢を崩さない。顔は横に向けて、目を伏せてはいるが。

私は、笙子の下腹部に顔を押つけた。甘酸っぱい女の子の匂いが鼻腔をくすぐる。

「ん……いい匂い」

「……今日の沙紀さんで、……すごく……エッチ……」

「こーゆーの、いや？ その割には、喜んでるみたいけど？」

溢れんばかりに蜜を湛えた泉がその証。どんなに恥ずかしいことであっても、私に愛されれば笙

子の身体は反応する。

「やっぱり、笙子の身体ってすごく綺麗。とっても可愛い」

「そんな……」

全裸になった笙子を、私はまじまじと観察した。胸の成長だけではない。身体全体が、半年前よりも女らしさを増しているようだ。腰から太股にかけて「少女」と「女」の中間の曲線を描いている。

「それに、とっても感じやすく素敵。私に脱がされただけで、こんなに濡らしちゃって」

人差し指の先ですうっと、割れ目をなぞる。

「ひゃっ！」と短い悲鳴を上げて、笙子はぺたんと座り込んだ。ちよつと触れただけで、私の指は笙子の愛液に覆われている。

「脱がされただけ……じゃないですよ。沙紀さんがいつぱい触って、すごくエッチなんですもん……。ずるい、私だけ裸なんて……」

「じゃあ、私の服は笙子が脱がせてくれる？」

私はいつも自分で服を脱いでいたけれど、笙子に脱がされる光景というのも、想像しただけでド

キドキする。

笙子は目を輝かせて立ち上がった。小さく舌なめずりまでして、私のセーターに手をかけた。

今日の私は、珍しくミニスカートなんて履いている。脱ぎやすいように……って配慮なんだけど、笙子はやたらともつたいつけて、ゆっくりと脱がしていく。もちろんその間、内腿や、あるいはもつと敏感な部分に触れながら。

私のことを「エッチ」って言うけど、笙子だって負けていない。私の反応を楽しんでいる。

これって、悪くない。

笙子に脱がせてもらう方がずっと興奮する。何故だろう。以前、彼氏に服を脱がされていたときよりも、感じてる。

「っ！」

笙子の指が軽く触れただけで、全身が痺れてしまふ。ショーツの上から割れ目をなぞられて、私は息を呑み込んだ。一瞬遅れて、身体の奥から熱いものがじわつと滲み出してくる。

「んふ」

悪戯な笑みを浮かべながら、笙子の手がショー

ツを下ろしていく。濡れそぼった秘所を彼女の目に晒しているのだと思うと、そこはよりいっそう熱くなる。

「嬉しいです。沙紀さん、すごく感じてる」

立ち上がった笹子が、私の胸に顔を埋めるようにして抱きつく。

「当たり前じゃない。笹子に触られてるんだもの」

私も、笹子の身体を抱きしめた。

火照った肌と肌が密着する。服を着たまま抱き合ったときよりもずつと気持ちいい。

滑らかな笹子の肌は、まるで吸い付くみたい。

しっかりと抱き合って、二人の身体に挟まれたお互いの乳房が、ふにやつと潰れる。

抱き合うことにはばかり意識が集中して、バランスが崩れた。私たちはしっかりと抱き合ったまま、ベッドに倒れ込んだ。

そのまま笹子に覆いかぶさって、鎖骨の上にキスをする。それから少しずつ、胸の方へと唇を滑らせていく。

「あ……っ、やつ！ や……だ……」

予想外の抵抗だった。笹子は、両手で私の身体を押し返そうとする。

「どうして？」

私はむっとした口調で訊いた。少し、傷ついてた。ここまで来ておあずけなんて、ひどすぎる。

「最初は、わたしがするんです。わたしが、沙紀さんを気持ちよくしてあげます」

真剣な表情で訴える笹子に、私は思わず吹きだす。

「そんなの後でいいじゃない。最初はいつも通り、私がしてあげるってことで」

年齢差、経験差、そして性格。私が「攻め」になるのが普通だった。

それでも何度か笹子に攻められたこともあり、それはそれですごく気持ちよかったのだが、やっぱり久しぶりなんだし、可憐な美少女が私の愛撫で乱れるところが見たい。

「ただど笹子は、そんな私の意見を却下した。」

「だって……沙紀さんってば……」

台詞の後半はごにょごにょと小さな声になる。

「なに？」

訊き返したのは意地悪ではなく、本当に聞き取れなかったためだ。

「……すごく激しくって……。わたしがへとへとに疲れて失神しそうになるまで、止めてくれないんですもん」

「あはは。なーんだ、そんなこと」

それは確かにその通り。だけど、仕方がないじゃない。

「だあって。笙子が悶える姿って、すごく可愛いんだもん。ついやりすぎちゃう」

「だから、私が先にします」

頑として譲らない。笙子は顔に似合わず、意外と強情なところもある。

「今日は、バレンタインのプレゼントのために来たんですから、これもプレゼントのうちです」

私の胸に手を伸ばしながら言う。私も同じように、笙子の胸を掌で包んだ。

「だあーめ、私が先。年上の言うことを聞きなさい」

「ごういうことに年上も年下も関係ありません」

笙子は両手で私の乳房を揉みしだく。それなら

ば……と、私は笙子の下半身に手を伸ばした。

「やつ……！ 反則う……」

身体を振って悶えながら、笙子も同じことをしてくる。

「あつ……っ！ こらっ……はあっ！」

まったく同じ、ではなかった。いきなり、指を中まで入れてきたのだ。

これまでさんざん抱き合ったりキスしたりして、私の身体はすっかり準備ができあがっていた。ただでさえ華奢な笙子の指だから、すんなりと受け入れてしまう。それが与えてくれる刺激に酔いしれそうになる。

「ん……うふっん……っ！」

気持ちいい。だけど、先手を取られてこのまま流されてしまつては、年長者の面目が立たない。

私は本格的な反撃に出た。中指を割れ目にもぐり込ませて、前後に滑らせる。いきなりの挿入は、笙子には逆効果だから。

そこはもう十分に潤っていた。摩擦係数は限りなくゼロに近く、なんの抵抗もなく指が滑る。

「やつ……あん！ あつ……あん！」

「やああつ……」

「たちまち、泣きそうな声を上げはじめた。私はさらに人差し指と中指を揃え、小さなクリトリスを間に挟むようにして前後に滑らせる。割れ目全体とクリトリスを同時に攻めるこの指使いは、笙子のお気に入りのテクニクの一つ。」

「はあつ！……ああんつ、あつ……あつ……ああんつ！」

長い髪を振り乱して、笙子が悶える。私の中の指の動きは止まって、感じることに専念しはじめたようだ。

溢れだした蜜が、私の手を濡らす。

もう一息。

親指の腹でクリトリスへの愛撫を続けながら、中指を挿し入れた。

「あああつ！ ああああんつ やああ……」

笙子の身体が仰け反る。そのままいつてしまうかな……と思つたら、土俵際で踏みとどまった。

「……沙紀さん、ずるい！ そんなに……」
「つ……あうつ！ んつ……こらっ！」

私の中の指が、動きを再開した。中指と人差し

指の二本で、かき回すように激しく。思わず、それに合わせて腰が動いてしまう。

笙子は右手で私を攻めながら、もう一方の腕でぎゅつとしがみついてくる。私も、空いている腕を笙子の身体に回した。

片手でしっかりと抱き合つて、片手で相手を攻め立てて。

「おつ……となしく、いうこと聞きなさ……ああうつ！」

「……さ……あつ、沙紀さん……こそ……あんつ！ あああんつ！」

お互い一步も譲らないまま、どんどん昂つていく。なんだか妙な展開になってしまった。

「じゃ……あつ、……先に、相手をいかせた方が……勝ちつて……」

「……女と女の勝負……ですねっ……ま、負けませ……んよっ」

ここまで来たら意地がある。負けるわけにはいかない。

お互いむきになって、相手を攻め続ける。指の動きはどんどん激しくなっていくから、快感の度

合いも加速度的に高まっていく。

ぴちゃぴちゃ、くちやくちや。

湿った音が響く。私の手はびしょ濡れだし、私を攻め立てている笙子の手も同様だろう。

ベッドの上で横向きに抱き合って、相手の股間に手を入れて。

少しでも相手を感じさせようと、精一杯指を動かしている。

二人の甘く切ない声のハーモニーが続く。

「ふっ……んっ……無理してないでっ、さっさと
いつちやい……なよ」

「沙紀さ……ん、こそお。ああ……ん……すっく……
感じてるくせに……い」

お互い、涙目になって。

涎まで垂らしてる。

残り少ない理性は抵抗しようとしているのに、
身体は勝手に相手の指と同調して動いている。

太股を閉じて、手をぎゅっと挟み込んで。

一気に、快感の頂へと昇っていく。

本来にもう、今にもいきそうだった。その気になればいつでもいける、綱渡りのような状態で辛

うじて踏みとどまっている。

笙子も、同じような状態に見えた。

テクニクという点では私の方がかなり有利なはずだが、しかし笙子よりもずっと成熟している私の身体は、未熟な笙子よりも感じやすい。結果、戦況は互角だった。

指の動きをさらに速くする。すかさず、笙子も同じことをしてくる。

「ああんっ！ あああんっ、あんっ！ あんっ！

あああんっ！ いやああんっ！」

「はあっ、あああっ！ ああっあっ、

ああああっ！」

いい。

いつちやう。

もう我慢できない。

これ以上我慢したら、気を失ってしまいそう。

いつちやう。

いきたい。

無我夢中で、笙子の唇を貪った。笙子も必死に舌を伸ばしてくる。

大きく口を開いて、舌を絡めあつた。

「んんっ！ん……うん！」

「あん……んっ！んんんーっ！」

二人の指の動きが同時に止まった。

ぶるぶると痙攣して、相手を抱いている方の腕に力が入る。

私たちはタイミングを合わせたかのように、まったく同時に達してしまった。

その後しばらく、黙って抱き合ったまま余韻に浸っていた。

二人とも汗びっしょりで、息が荒い。

背中に触れるひんやりとしたシーツの感触が気持ちいい。シーツを濡らしているのは汗だろうか、それとも別のものだろうか。

なにしろすごく感じてしまったから。

「……ひ……引き分け……ですね」

「……そうだね」

普通ではない感じ方だった。無理にいくのを我慢していたせいか、いつもよりずっと高いところまで昇ってしまった感じ。

勝負は、引き分けだった。

ただど一つ、私が勝っていることがある。

「ふっふっふ……、隙だらけー」

「……あ……ん……や……あ」

私は、まだ半ば朦朧としている笙子に襲いかかった。まだ経験が浅くて、小柄で華奢な笙子よりも、経験豊富で体力には自信のある私の方が、

回復はずっと早いのだ。

抵抗しようにも、笙子は身体に力が入らない。

強引に脚を大きく開かせて、その中心に顔を埋めた。舌先でくすぐりながら、鼻を擦り付ける。

「や……っ、あっあっ！ はっ……あっっ！」

ぐったり、ぐにやぐにやの笙子の身体。それでもしっかり感じているようで、甘く切ない声だけが響く。

「やあっ！ ああんっ！ ああんっ！

ああっ……、やん！ やあんっ！」

舌先を小刻みに震わせながら顔を動かして、小さな割れ目の隅々まで舐めまわす。

ひと舐めごとに、熱い蜜が湧き出してくるようだ。

その部分はすごく熱くなって、真っ赤に充血していた。

また、指で触れてみた。

すごく熱くて、柔らかい。

指先に少し力を入れると、まるで溶けたバターのように指を差し込むように、なんの抵抗もなく中にもぐっていく。

こんなにとろとろなのに、それでも中は狭くて、私の指をきゅうつつと締めつけてくる。きついのは半年前と同じだけど、固さが感じられた以前とは違い、柔らかくほぐれて指にからみついてくる。

こんなとき、自分が女であることがほんのちよつとだけ悔しい。

もしも私が男で、ここに男性器を挿入したなら、きつと素晴らしく気持ちいいだろう。いつペン味わつてみたい。だけどそれは叶わぬ願いだから、私の目の黒いうちは、どんな男にもこれを味あわせはしないと心に誓った。

これは、私だけのもの。

「ん……っ、んんっ！」

指を二本挿入すると、笙子は少しだけ苦しそうな声を出した。狭い膣口がいっぱいに広げられている。

私は二本の指を揃えて、回すように動かした。最初はゆっくり、そして少しずつ速く。

卵白を泡立ててメレンゲを作るときのように、激しく中をかき混ぜる。卵白に似た白濁した粘液が泡立っている。

そこへ、味見をするかのように舌を伸ばした。

「あああ　っ！　ああんっ！　あっ、あ

っ！」

断続的な悲鳴を上げて、笙子の身体がベッドの上で何度も弾んだ。

「いい？　気持ちいいでしょ？　もう、いきそう？」

「やああ　　っ！　あああっ！　いつ

ああああ　　つつ！　　っ！」

私の声なんてまるで聞こえていない。

甲高い悲鳴は肺が空っぽになるまで続き、そして唐突に止んだ。

おやと思つて顔を覗き込む。

少し、やりすぎてしまったらしい。

笙子は完全に気を失っていた。

* * *

しばらくして目を覚ました笙子は、しばらくぐすぐすと泣いていた。

今日は自分が攻めになつて私を悦ばせるつもり

だったのに、一方的にやられてしまったから。

「……ひどいです。こんなに……」

「いいこととしてあげたのに、泣かないでよ」

「わたしだって、沙紀さんをいっぱい感じさせてあげたいのに」

笙子は意外と負けず嫌い。

そしてなにより、私と対等になりたがっている。私の被保護者ではなくて、対等の恋人になりたいのだ、と。

目に涙を浮かべて訴えられては、私も折れるしかない。愛しい笙子を抱きしめて、耳元でささやいた。

「じゃあ、今度は笙子がして。いっぱい、いっぱい気持ちいいコトして、感じさせてくれる？」

「もちろんです」

先刻の仕返しのもつもりなのか、きつぱりと言いきった笙子の攻めはすごく激しかった。

私は十五分後には、泣きながら「もうやめて」と懇願していた。もちろん笙子はやめてはくれず、私はその後五回もいかされて、ついには失神してしまった。

* * *

そんな調子で、私たちは夕方まで休むことなくお互いを求めあつた。二人とも、何度絶頂を迎えたのか数え切れないほどだ。

昨年の夏一緒に暮らしていたときは、ここまではじけたことはない。この半年分の想いをぶつけるような、激しいセックスだった。

さすがにへとへとに疲れ切つてふと時計を見ると、もう午後五時を回っていた。桜子さんとは六時に札幌駅で待ち合わせなのだから、もう出発する準備をしないといけない。まずはシャワーを浴びなければ、二人とも汗やなんかでべとべとだ。

「笙子、そろそろ帰る用意しないと」

俯せになつて眠つたような笙子の背中を叩いて起こす。しかし笙子は、枕に顔を埋めるようにして頭を左右に振つた。

「笙子」

「……嫌。帰りたくない」

「笙子！」

私だって同じ想いだ。去年の夏休みみたいに、
ずっと一緒に暮らしたい。

「ただ、そんなことはできない。」

「私も、空港まで送っていくから」

それでも笙子は、いやいやと首を振る。

「……二度と、会えなくなってもいいの？」

「嫌っ！ 絶対嫌！」

「じゃあ……、今日は、帰ろう？」

ようやくのろのろと身体を起こした笙子の頬は
濡れていた。私は指でその涙を拭って、軽く唇を
重ねた。

両手で笙子の顔を挟むようにして、間近で見つ
め合う。

「春休みになったら、また会いに来てよ。なんな
ら、私の方から東京へ行ってもいいし」

笙子が抱きついてくる。私の胸に顔を埋める。

「その後だってGWとか、夏休みとか、チャンス
はいっぱいあるよ」

「……ん」

私の胸に顔を押しつけたまま、笙子は小さくう
なずいた。

午後六時三分前に札幌駅に着くと、桜子さんはもう改札の前で待っていた。新千歳空港までの三枚の乗車券まで持って、私が空港まで見送りに行くことも見越していたらしい。

この頃には笙子もいくらか元気を取り戻していた。

「桜子さんは、何をしていたんですの？」

「せっかく札幌へ来たのですから、ススキノでジーンズカンとラムしゃぶとカニを食べて、ついでに小樽まで足を伸ばしてお寿司を食べてました」

「……今日の午後だけで、それを全部？」

「ええ」

当たり前のようにうなづく桜子さんは、身長こそやや高めではあるが、コートの上からでもわかるくらい細身だ。この身体のいったい何処に、ジーンズカンとカニとラムしゃぶとお寿司が入っているのだらう。謎の多い人だ。一度詳しく訊いてみたい。

しかしそんなことよりも、もっと重要な質問が

あった。空港内のレストランで夕食を食べた後、笙子がお手洗いに立ったときに、私は訊いてみた。

「……今日は、ありがとうございます。笙子と会わせてくれて。笙子の父親には、内緒なのでしよう？」

彼女の肩書きは、笙子の家庭教師ということになっている。単に勉強を教えるだけではなく、笙子の生活すべてについての教育係、世話係であり、お目付役でもある。今日のことは明らかに、雇い主である笙子の父の意志に反した行動だろう。

「お礼なんか言われると、罪悪感を覚えますね」

桜子さんは苦笑しながら応える。

「罪悪感？」

「元々、お嬢様とあなたを引き離したのは私ですから」

そう白状した。半年前、家出して私の部屋に転がり込んでいた笙子を探し出し、連れ戻したのは彼女なのだそうだ。

「だったら、何故」

今回は、私と笙子を会わせる手引きをしたのだらう。

その質問に、桜子さんは微笑んで答えた。

「私は、人形のお世話をしているわけではありませんが。あなたと出会って以来、お嬢様は変わりました。たぶん、いい方向に。それに、お嬢様があなただけのことをどれほど強く想っているのか、傍にいれば一目瞭然ですからね。私だって女です。好きな人に会いたいという気持ちはよくわかります」

「……あの、あなたは、その……私と笙子の、その、関係をご存じ……なんですよね？」

「もちろん」

「……いいんですか？」

自分の教え子が、同性愛に走るのを見過ごしても。

「異性と付き合うよりは、安全だと思いますけどね」

って笑って言うけど、そういう問題ではあるまい。

「同性か異性かという以前に、十代の頃の恋愛の経験は、貴重なものだと思います。遊びならともかく、あなたも真剣なようですし、今のところ強

く反対する理由はありません。とはいえ……」

桜子さんはそこで、これまで見せなかつた子供っぽい笑みを浮かべた。

「お嬢様はまだ中学生ですし、もう少し節度を持つた付き合いをしていただけるといいのですが」

「…………」

私は、何も言えなかつた。ただ真つ赤になつて俯いた。私たちが愛し合っていることだけではなく、肉体関係があることまで見抜かれていたなんて。

でも、桜子さんの言う通りなのだ。たまにキスしたり、抱擁したりするくらいならまだいいだろうけれど、今の私たちは確かにちよつとはめを外している。もう少し、笙子の年齢相応の健全な付き合い方も考えるべきかもしれない。

「……善処します」

私はなんとか、それだけを答えた。

「ですから、その……。これからも時々、笙子と会う機会を作っていただけですか？」

笙子との付き合いを続けるには、彼女の協力が

不可欠だった。そうでなければ、会うこともままならない。

嬉しいことに、桜子さんはうなずいてくれた。「いろいろと、考えていることはありますよ。そのうちにまた、あなたにもご連絡いたします」

この時ちようと笙子が戻ってきたので、話はそこで打ち切った。いずれまた、そう遠くない未来に笙子と会える、それだけで私には十分で、あまり深くは考えなかった。

しかし、もう少し気を付けているべきだったかもしれない。桜子さんがこのとき見せた、悪戯な笑みの持つ意味を。

「……桜子さんに、してやられたわ」

私は苦笑した。

前に立つ笙子も、喜びと困惑の入り混じった、引きつった笑みを浮かべている。

その年の夏、私は笙子と再会した。

場所は、東京。

お金持ちのお嬢様が多く通う、某私立女子校で。春に大学を卒業した後、私は就職もせずしばらくぶらぶらと過ごしていた。教員免許は持っているものの、教員余りのこのご時世、なかなか就職先はない。

今年の『L ファイト』の優勝賞金と、空手道場の指導員のアルバイトで食いつないでいた私に、ある日突然、急な欠員が出た東京都内の某私立女子校の体育教師という話が舞い込んできたというわけだ。そしてその高校には、長い黒髪を持つ美少女が通っていた。

これはもちろん、桜子さんが手を回したことに違いない。菱川家のコネを使えば、私立高校の教師の席の一つくらいはなんとでもなるのだろう。

「いろいろと、考えていることはありますよ」冬に会ったとき、意味ありげにそう言っていたことを思い出す。

私たちは、毎日のように会えることになった。

「やっぱり、桜子さんにお礼を言うべきなのかな。……どちらかというと、文句のひとつも言ってやりたいところだけど」

「……ですよね、やっぱり」

二人揃って困ったような顔をしているのには訳がある。

嬉しい。けれど、素直に喜べない。

なにしろ教師と生徒なのだ。気軽には手を出せない関係になってしまった。

同性を愛したっていい、少くくは肉体的関係を持つてもいい、だけどそれにばかりのめり込むようでは困る。そう言っていた桜子さんが出した結論が、この関係なのだろう。

笙子が卒業するまでは「節度を持った付き合い

い」をしなければなるまい。

「でも……学校では毎日、会えるんですよね」

「そうだね。それは、いいよね」

たまに……だったら、外でこっさり会って『大人のデート』をすることも許してくれるだろうか。それだけが少し気がかりだった。

終わり

閲覧に関する注意事項

このPDFファイルは、画面での閲覧、紙への印刷の両方に適合するようにレイアウトされているため、閲覧時にはちょっとした工夫が必要です。

モニタ上での閲覧

モニタ上で読む場合、ブラウザやアクロバットリーダーのサイズを横長にして、ちょうど半ページが画面に収まるようにしてください。すると、Enterキー(Returnキー)で半ページずつ読み進めていくことができます。

画面解像度が高い場合(1280×1024以上)、ウィンドウサイズをできるだけ大きくして、1ページ単位で表示することもできます。その場合は、表示モードをデフォルトの「幅に合わせる」から「全体表示」に変更します。

なお、モニタ閲覧には旧タイプのレイアウトの

方が適しているかもしれません。(その代わり、旧レイアウトは印刷向きではないのです)

どうしても旧レイアウトで読みたいという方は、北原宛にその旨メールでお知らせください。個別に対応いたします。

印刷しての閲覧

印刷して読む場合、用紙サイズはB5を使用します。

印刷実行前に、アクロバットリーダーのプリンタ設定を確認してください。

高性能のレーザープリンタを使用する場合、プリンタの「2ページ印刷」の機能を用いた方が、実際の本に近い文字サイズで読みやすいかもしれませんが、(縮小してB6用紙に印刷するのでも可)

アクロバットのバージョンが4の場合、印刷が極端に遅くなる場合がありますが、これはソフトの仕様によるものと思われるのでご了承ください。